

相対的貧困率の動向： 2006, 2009, 2012年

2014年10月

阿部 彩

国立社会保障・人口問題研究所

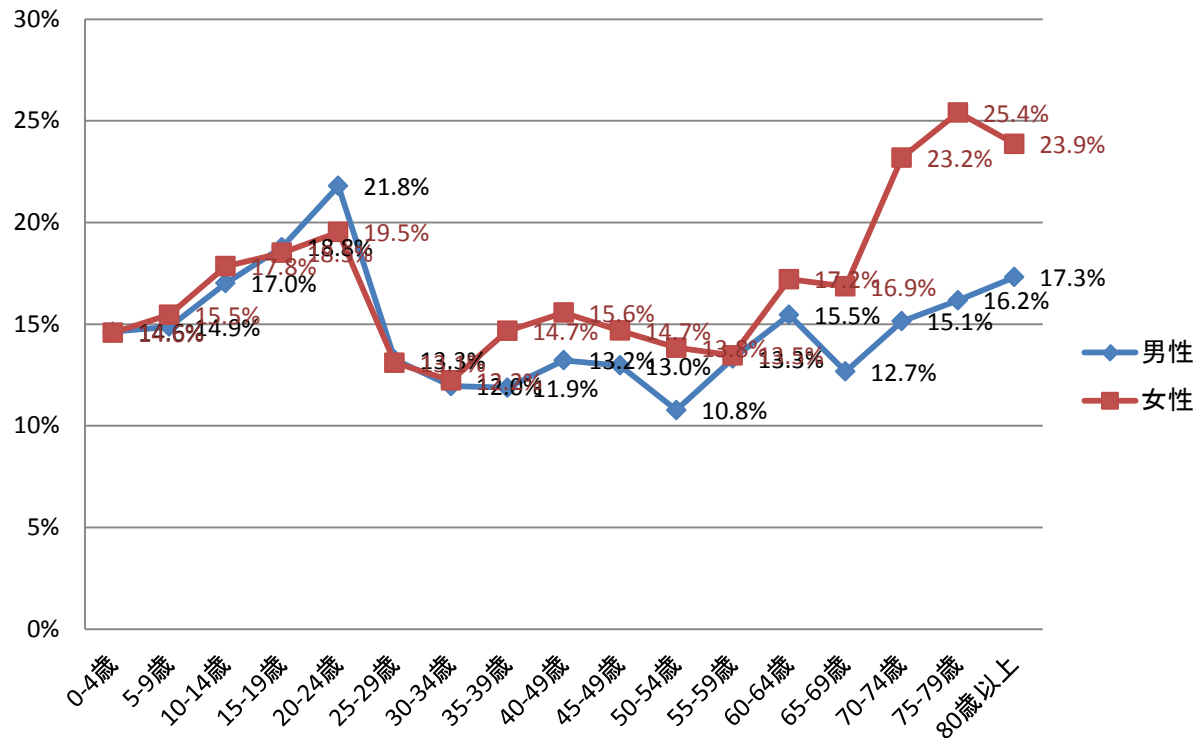
- 本報告は、厚生労働省「国民生活基礎調査」平成19年、22年、25年を統計法(平成19年法律第53号)第32条の規定に基づき、厚生労働省の許可を得て個票を二次利用したものです(平成26年8月28日付厚生労働省統発0828第1号)。
- 本報告は、文部科学省科学研究費助成事業(基盤B)「貧困の体系化に関する研究」(平成25～28年、研究代表者:阿部彩)の一環として行っています。
- 引用の際には、「阿部彩(2014)「相対的貧困率の動向:2006, 2009, 2012年」貧困統計ホームページ (www.hinkonstat.net) と明記して下さい。

データと定義

- 厚生労働省「国民生活基礎調査」平成19年、平成22年、平成25年
- 貧困率は、各調査年の前年の所得を聞いた質問から計算されるため、貧困率の該当年は2006年、2009年、2012年
- 所得の定義は、等価可処分世帯所得（世帯人数で調整した税後・社会保険料後・社会保障給付後の世帯合算所得）。再分配後所得とも呼ばれる。
- 世帯人数を調整する等価スケールは、世帯人数の平方根。
- 相対的貧困率は、等価可処分世帯所得が中央値の50%以下のものの割合。

年齢層別、性別 貧困率(2012年)

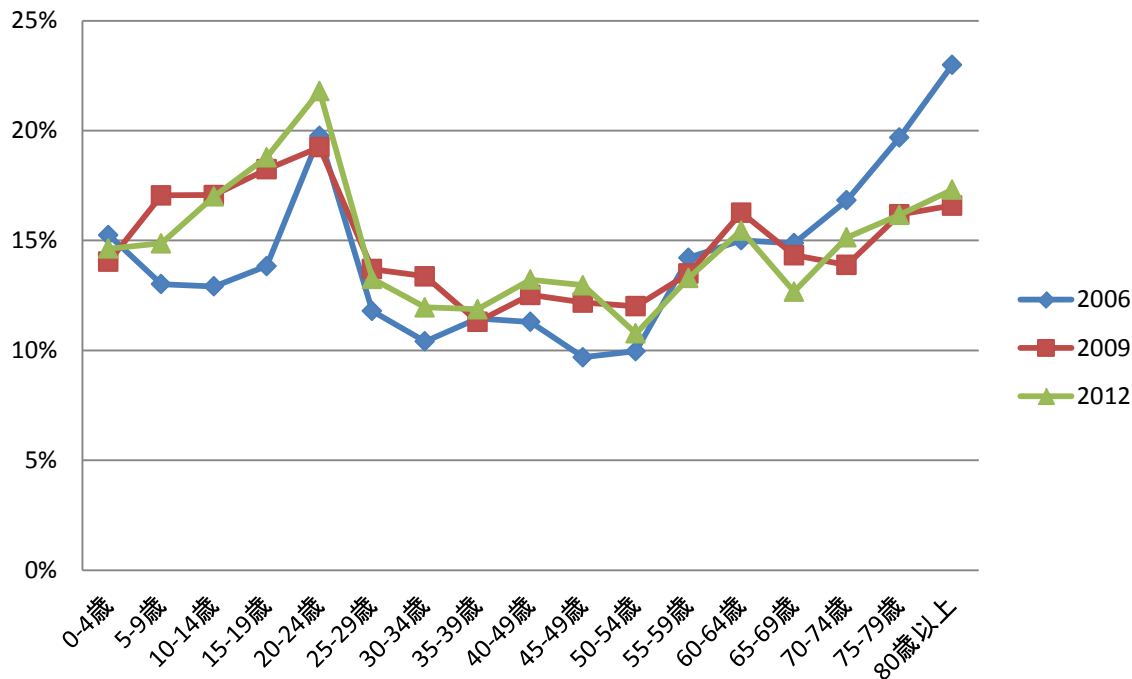
性別、年齢層別 相対的貧困率(2012)



- 年齢別、性別に相対的貧困率を見ると、男性においては20-24歳の貧困率が特に高く、25-29歳以降は10-13%で移行し、60-64歳から徐々に増加するものの、80歳以上でも17%台に留まっています。
- 一方、女性では同じく20-24歳で一つのピークを迎えますが、その後、50-59歳から急激に貧困率が増加し、70歳いじょうでは20%を超える数値が続きます。中年期でも、女性の貧困率は男性よりも高く、35-39歳からは常に女性の方が男性よりも高い貧困率となります。

男性の年齢層別貧困率：時系列の変化

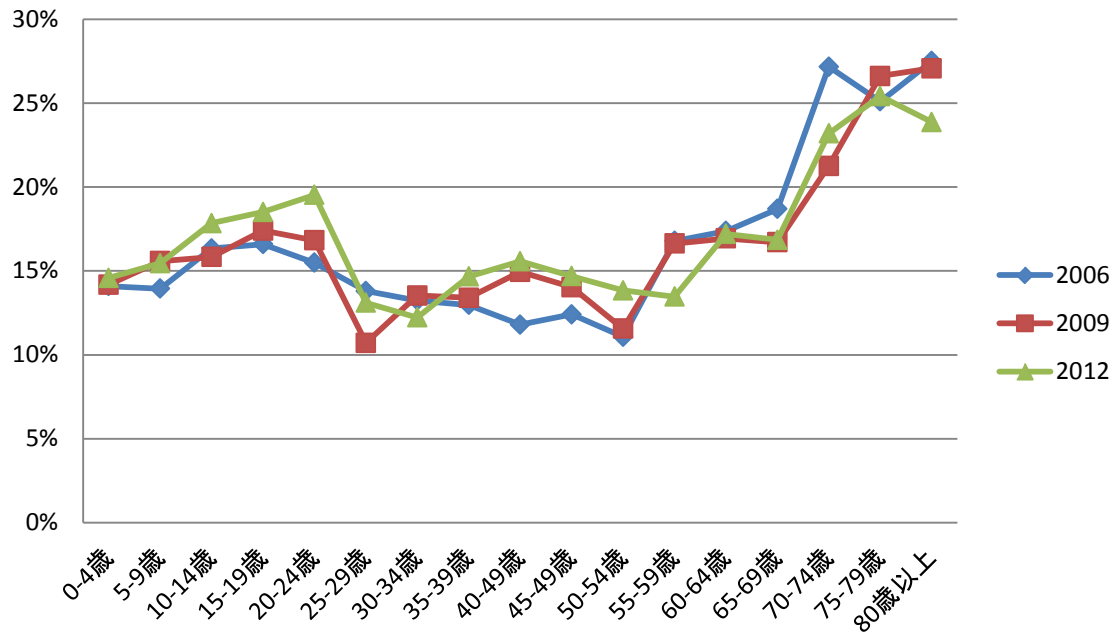
男性：年齢層別



- 2006年、09年、12年の男性の年齢階層別貧困率を見ると、まず、2006年から2009年にかけて、高齢層(65歳以上)の貧困率が大幅に下がり、その傾向が2012年にも確認されます。かつて見られた高齢者の貧困問題は、男性に限って言えば、解消の方向にあります。
- 一方、20-24歳をピークとする子ども期から20歳前半の貧困の「山」が2012年も拡大方向にあることがわかります。20-24歳の男性の貧困率は21.7%と5人に1人という状況となり、男性の年齢層別では、もっとも貧困のリスクが高いのが子ども期となっています。
- しかしながら、ピークの直後の25-29歳の貧困率は比較的に低くなっており、個人個人のライフコースから見れば、25-29歳になれば貧困のリスクが収まりつつある可能性があります。

女性の年齢層別貧困率：時系列の変化

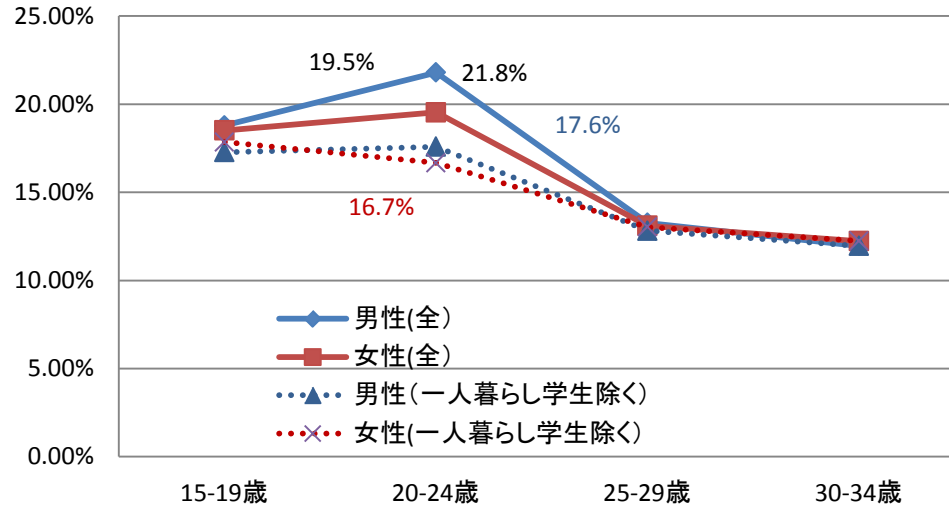
女性 年齢階層別



- 女性の年齢層別貧困率を時系列で見ると、男性で見られたような高齢者における貧困率の低下は女性では見られません。2012年の高齢女性の貧困率は、年齢階層別に見ると、80歳以上で低下がありますが、それ以外では2009年と大差はありません。
- 一方で、20-24歳をピークとする子ども期から20代前半にかけての「山」は徐々に大きくなってきています。
- 中年期(25-64歳)の貧困率は、2009年に比べて、大きな変化はありません。

一人暮らしの学生を除いた貧困率（2012）

若者の貧困率：一人暮らし学生除く

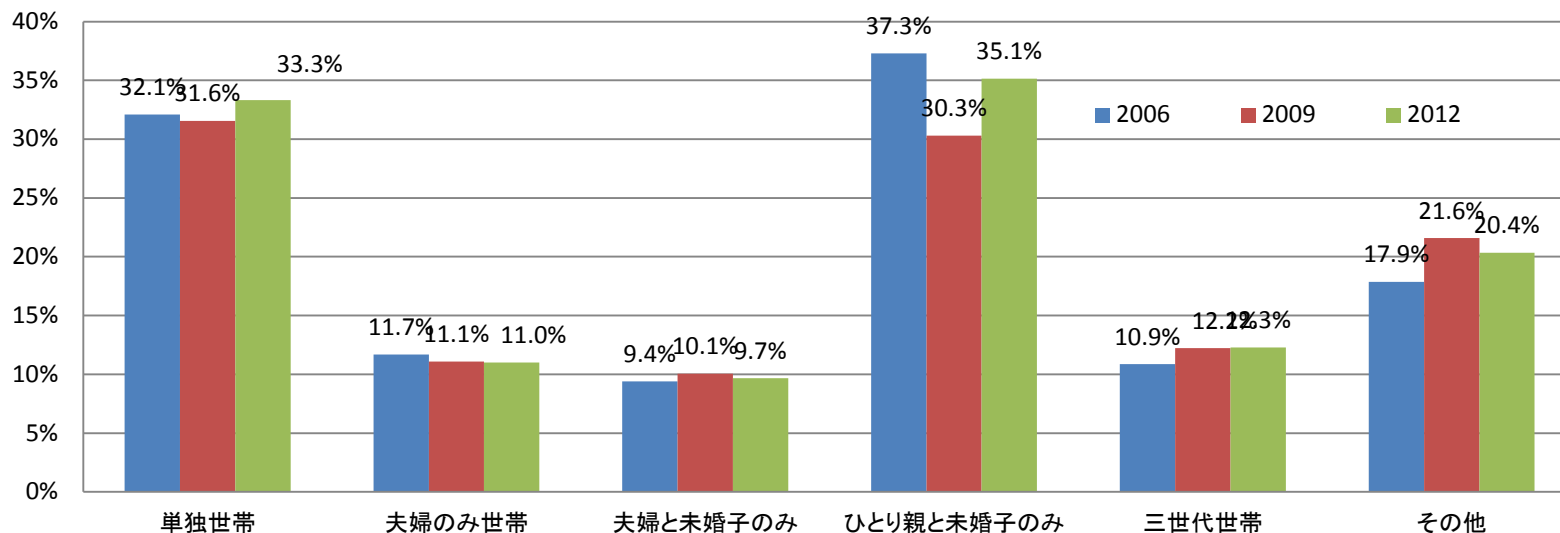


- 一人暮らしの学生は、生活の基盤が実家にあると考えられるため、貧困率の推計から除外した推計が上のグラフです。すると、一人暮らしの学生を除かない貧困率に比べて、特に、20～24歳の年齢階層の貧困率が下がります。男性では、21.8%から17.6%に、女性では、19.5%から16.7%となります。これによって、20-24歳の「ピーク」は小さくなりますが、しかし、依然として、15-19歳、20-24歳が他の年齢層に比べて、高い貧困率であることは変わりません。

- 15歳から24歳の男性の貧困率が急増している背景には、学生がこの年齢層に占める割合の増加と学生の貧困化があります。
- ひとり暮らしの学生の貧困率も高いですが、親と同居している場合(「夫婦と未婚子のみ世帯」「一人親と未婚子のみ世帯」「三世代世帯」)に

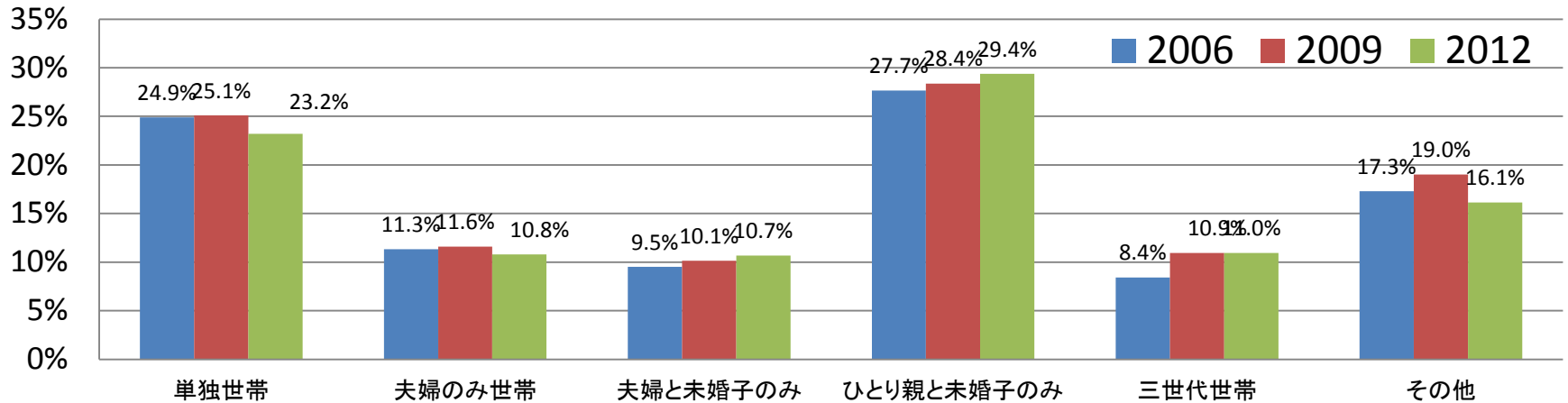
勤労世代(20-64歳)女性の貧困率：世帯タイプ別

勤労世代(20-64歳)女性の貧困率：世帯タイプ別



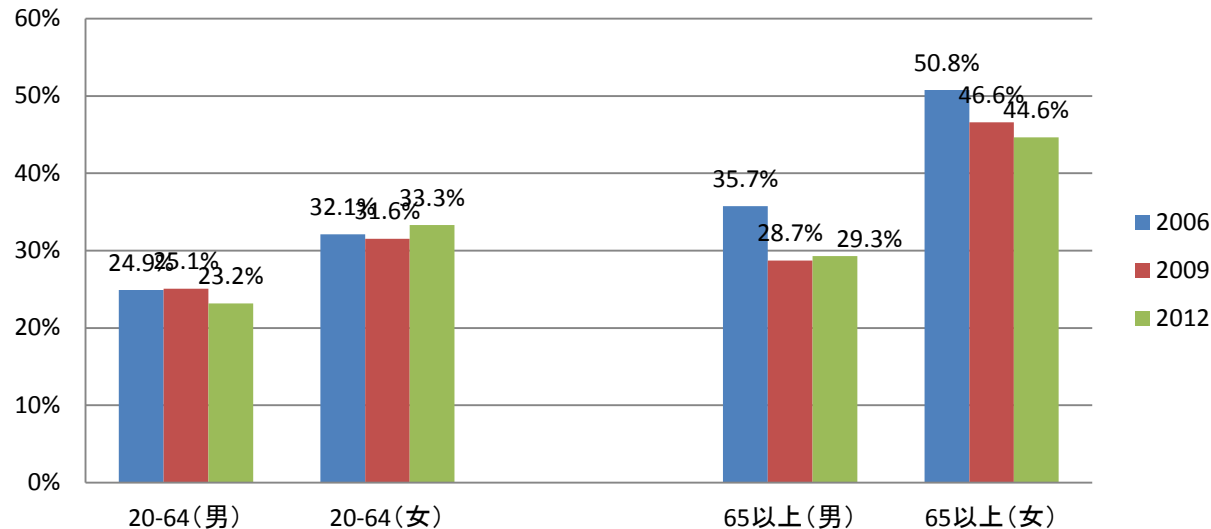
勤労世代(20-64歳)男性の貧困率：世帯タイプ別

勤労世代(20-64歳)男性の貧困率：世帯タイプ別



一人暮らしの人々の貧困率：時系列

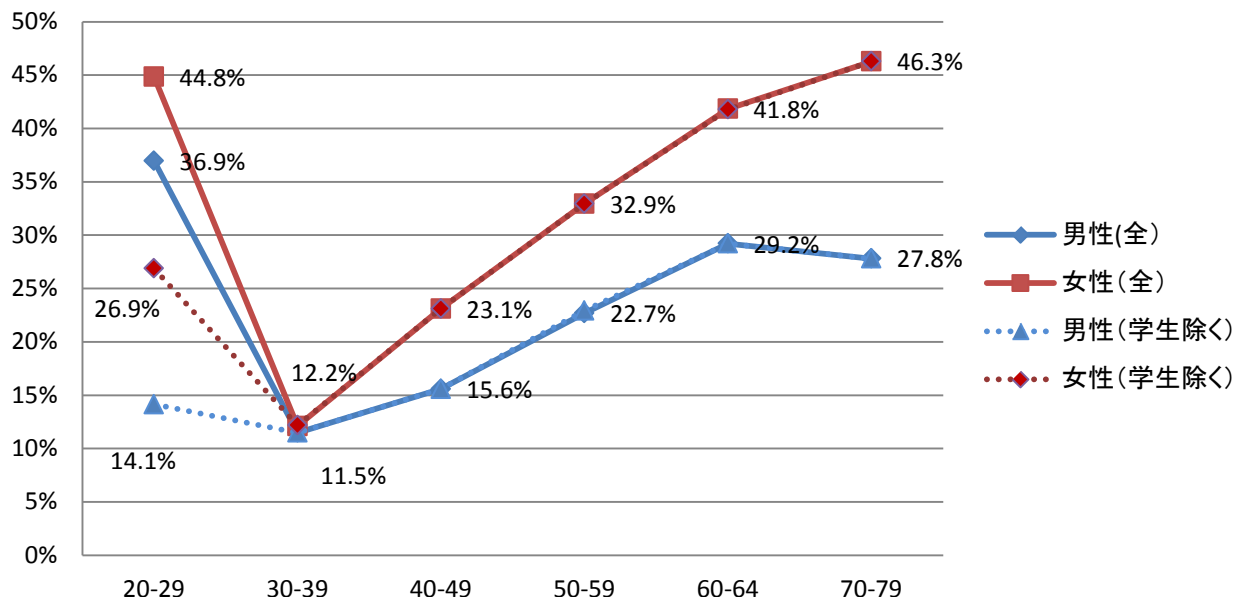
一人暮らし世帯の貧困率



- 一人暮らし世帯(単独世帯)は、ひとり親世帯と並んで、最も貧困率が高い世帯タイプです。
- 勤労世代(20~64歳)においては、一人暮らしの男性の約四分の一、一人暮らし女性の三分の一が相対的貧困にあります。一人暮らしの勤労女性の貧困率は、2006年から若干の増減はあるものの、ほぼ横ばいとなります。ただし、一人暮らしをする女性の割合は増えており、国勢調査で見ると、2006年のX万人からX万人となっています(これに対応する一人暮らしの女性の数の増加は、XXX万人からXXX万人となります)。一人暮らしをする男性の割合は……。
- 一方、高齢の一人暮らし世帯の貧困率は、減少の傾向にあります。男性では、2006年の35.7%から2012年の29.3%となりました。女性では、50.8%から44.6%と減少していますが、それでも5割近い高い数値となっています。高齢の一人暮らし世帯は、数・高齢者に占める割合共に急増しており、……。

学生を除く単独世帯の貧困率

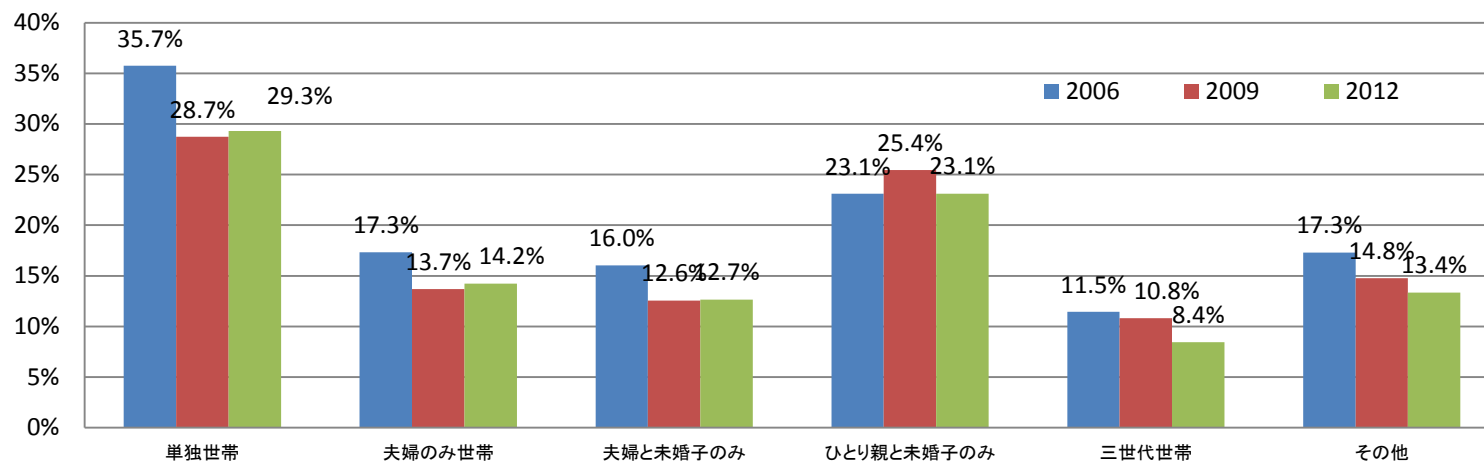
単独世帯の貧困率：年齢(10歳)階層別、性別



- 若い単独(一人暮らし)世帯の多くは、学生のひとり暮らしです。学生の場合は、生活の基盤が実家にあると考えられるため、学生を抜いて単独世帯の貧困率を推計すると、上のグラフとなります。
- 20~29歳の年齢層では、学生を含めた場合と、含めない場合で大きく貧困率が異なります。しかし、学生を除いた場合においても、女性では26.9%、男性では14.1%と低くない数値です。
- 単独世帯の貧困率は、男性、女性ともに、30~39歳で一番低くなりますが、その後、年齢とともに増加します。特に女性の単独世帯の貧困率は大きく増加します。なお、30歳以上では、学生の単独世帯が殆どないため、学生を除いた推計値は学生を含めたものと同じです。

高齢男性の貧困率：世帯タイプ別

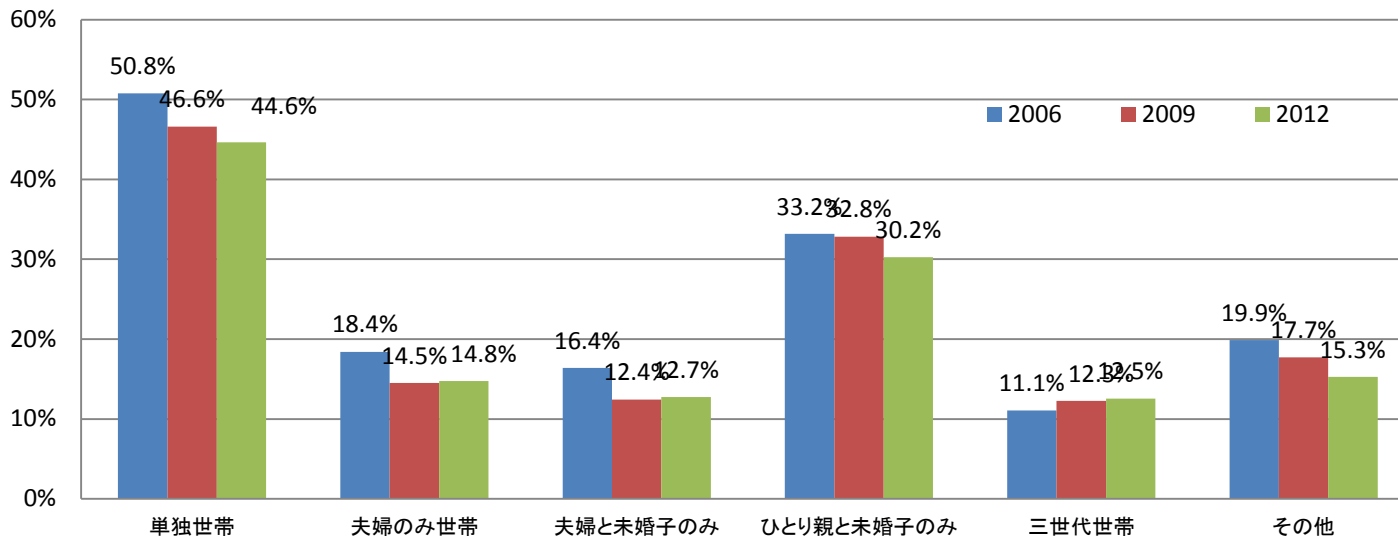
高齢(65+)男性の貧困率：世帯タイプ別



- 高齢男性の貧困率は全般的に低下傾向にあります。「ひとり親と未婚子のみ世帯」以外では、どの世帯タイプで見ても、2006年に比べ、2012年の貧困率が減少しました。

高齢女性の貧困率：世帯タイプ別

高齢(65+)女性の貧困率：世帯タイプ別



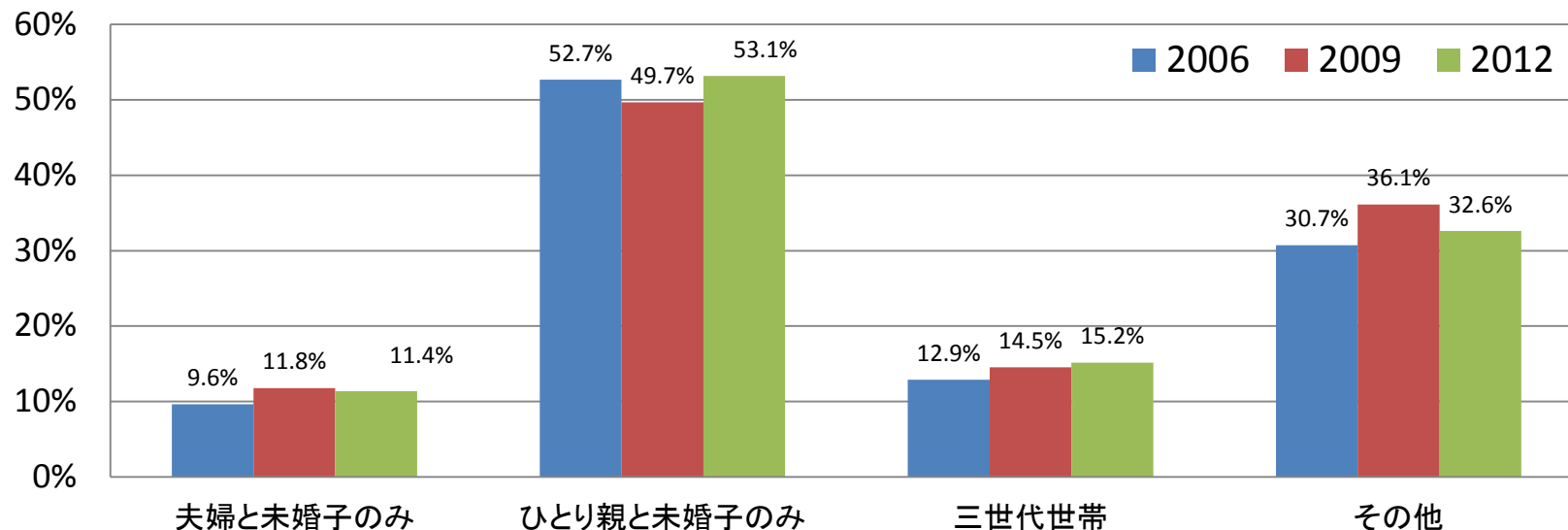
- 高齢女性の貧困率も全般的には低下傾向にあります。「三世帯世帯」以外では、どの世帯タイプで見ても、2006年に比べ、2012年の貧困率が減少しました。
- しかし、単独(一人暮らし)世帯の貧困率は、未だに4割を超えています。

「ひとり親と未婚子世帯」について

- 本報告で用いている「ひとり親と未婚子世帯」の定義は、厚労省「国民生活基礎調査」の定義に基づくもので、「父親又は母親と未婚の子のみで構成する世帯」です。
- この定義は、親や子の年齢については問いませんので、「子」には成人した子も含まれます。例えば、70歳の母親と40歳の未婚の息子といった世帯もこのタイプの世帯となります。**この世帯タイプの高齢者**は、おそらく成人した子と同居する老親ですが、勤労世帯の子（性別は不問）がいるにもかかわらず貧困率が高く、男性では23.1%、女性では30.2%となっています。

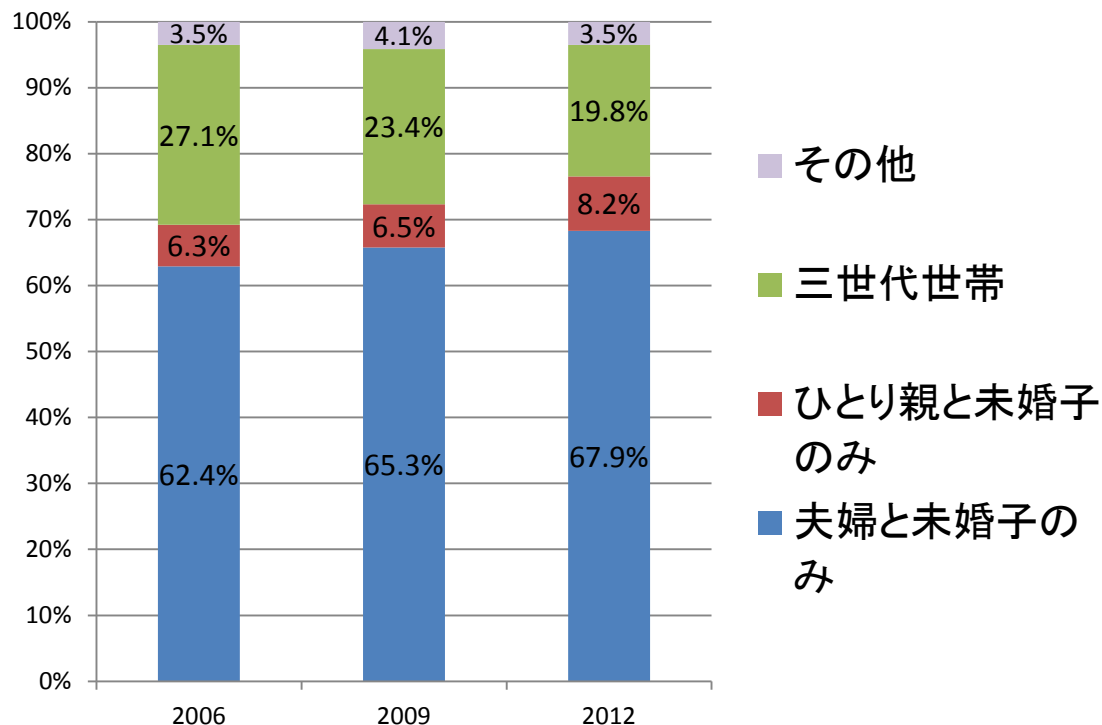
子どもの貧困率：世帯タイプ別

子ども(20歳未満)の貧困率：世帯タイプ別



- 子ども(20歳未満)の貧困率は、2006年から2012年にかけて上昇傾向にあります。
- 2006年から2009年にかけては、「夫婦と未婚子のみ世帯」、「三世代世帯」の貧困率が上昇した一方、「ひとり親と未婚子のみ世帯」の貧困率は減少しました。しかし、2009年から2012年にかけては、「夫婦と未婚子のみ世帯」の貧困率は横ばいですが、「ひとり親と未婚子のみ世帯」の貧困率は、2006年の貧困率を上回る率となりました。

子どもの世帯タイプの変化：2006-2012



- 2006年から2012年にかけて、三世代世帯に属する子どもが大幅に減少(-7.3%)。その代わりに、「夫婦と未婚子のみ世帯」の子どもが増加(+5.4%)。
- 「ひとり親と未婚子」も微増(+1.9%)していますが、三世代世帯の減少の多くは、三世代世帯の貧困率より低い「夫婦と未婚子のみ」に吸収されており、**子どもの世帯タイプの変化が子どもの貧困率の上昇の主原因とは考えられません。**
- 世帯タイプの分布が2006年のまま、各世帯タイプの貧困率が2012年のレベルになったとしても、貧困率は殆ど変わりません。

